様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００６５６

研究課題名（和文）ロシア・ウクライナ・ベラルーシの交錯――東スラヴ文化圏の領域横断的研究

研究課題名（英文）The Intersection of Russia, Ukraine, and Belarus: A Cross-Disciplinary Study of the East Slavic Cultural Area

研究代表者
沼野　恭子（Numano, Kyoko）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：６０５３６１４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,200,000円

研究成果の概要（和文）：「東スラヴ文化圏」は、ロシア・ウクライナ・ベラルーシ・ユダヤの文化が混在する多言語・多文化地域である。本科研は、この地域の文学・歴史・社会についてジャンル横断的な研究をし、その実相を明らかにしてきた。この地域では、それぞれの文化が、共通点を持ち緊密に連関し合う反面、それぞれの独自性を有してもいる。「東スラヴ文化圏」のそのような実態を解明するために、①文学・文化、②政治、③歴史を専門とする研究者が協力し合った。2020年初頭までは、この地域から研究者や作家らを招待して講演会やシンポジウムを催し、成果を論集にまとめるなど活発に活動していたが、コロナ禍のため、科研期間を延長して研究を続けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的な意義としては、領域横断的な共同研究を進め、東スラヴ文化圏に関する国際的なネットワークを構築して知的交流をおこなったこと、学術的に評価される著書を出版したり文学作品・芸術作品を翻訳・紹介したことが挙げられる。
社会的意義としては、本科研の期間中に、2020年8月以降ベラルーシで大規模な反政府デモが頻繁に起こり、2022年2月にロシア軍がウクライナに侵攻した際、これらの出来事の背景について理解を深めるためのさまざまな取組みを通して成果を社会に発信できたことだろう。

研究成果の概要（英文）：The "East Slavic Cultural Area" is a multilingual, multicultural region where Russian, Ukrainian, Belarusian, and Jewish cultures coexist. The purpose of this project is to conduct cross-genre research on the literature, history, and society of this region and to analyze its complex reality.
Until the beginning of 2020, we invited researchers and writers from Russia, Ukraine, and Belarus to hold seminars and symposiums, compiled proceedings, and published books and translations, but the spread of the COVID-19 pandemic made it impossible for us to hold events in person and travel. Therefore, online lectures and workshops were held instead to disseminate the results to the public. There were frequent large-scale anti-government protests in Belarus since August 2020, and Russian army invaded Ukraine in February 2022. Our joint research was instrumental in understanding the background of these events.

研究分野：ロシア文学、ロシア文化

キーワード：東スラヴ文化圏　ロシア文化　ウクライナ文化　ベラルーシ文化　ユダヤ文化　ロシア東欧史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）本研究を開始した 2018（平成 30）年春の段階では、2013 年のユーロマイダンに始まる「ウクライナ危機」を契機に国家間の対立を深めるロシアとウクライナで、排外的な傾向を持つ「ナショナルな文化」を強調する動きがますます強まっていくところだった。しかし、ロシア・ウクライナ・ベラルーシに跨る「東スラヴ文化圏」は、国境によって分けることのできない複雑な歴史と複層的な文化・アイデンティティが交錯している地域である。国家間の対立という捉え方では、この地域の実相を正しく理解したことにはならない。 ロシア・ウクライナ・ベラルーシは、言語のみならず多くの点で近接性や共通点が見られる一方、それぞれが独自の文化や伝統を築いてきた歴史があるからである。したがって、こうした複雑に絡み合う歴史を解きほぐして理解し、当該地域の社会や文化の構造やメカニズムを多言語的・複眼的・越境的な視点から考察することが喫緊の課題であった。

（２）本研究を進めていくさなかの 2020 年夏にベラルーシの大統領選が行われたが、その結果、不正疑惑に端を発した大規模反政権デモへと発展し、世界の耳目を集めることになる。当局による厳しい取り締まりによりデモは弾圧され、次第に沈静化していく。ベラルーシのこうした動きは、2011 年暮れから 2012 年にかけてロシアで起きた大統領選不正疑惑による大規模デモと同じような性質のものと言えよう。東スラヴ文化圏を対象とする研究の重要性が再確認されることになった。

（３）本科研（当初の予定では 2018 年度～2020 年度）は、先行する科研（B）「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの文学と社会に関する跨橋的研究」（2015 年度～2017 年度）を発展的に引き継ぐものとして構想されたため、すでに十分に研究の土台が整っていた。前科研の 8 名のメンバー（塩川伸明、鈴木義一、前田和泉、巽由樹子、福嶋千穂、越野剛、大森雅子、沼野恭子）が今回も全員参加し、さらに 1 名専門家（赤尾光春）を招き入れて、ユダヤ・アクターを強化することとしたのは、ユダヤ文化がスラヴ文化圏と歴史的に深く密接に結びついており、ユダヤ的要素を抜きに東スラヴ文化圏の全体像を把握することは困難だからである。

（４）東スラヴ文化圏の中でもウクライナ文化・ベラルーシ文化を専門とする研究者がきわめて少ないのが日本の現状である。このことを踏まえ、本科研は、ウクライナ文学・文化を専門とする日本人若手研究者を育てるとともに、日露の比較文学研究を専門とするベラルーシ人の若手研究者に、ベラルーシ文学・文化研究にも携わってもらうよう促した。このことにより、ロシア・ウクライナ・ベラルーシのそれぞれの視点から、バランスの取れた重層的な見解や内実を明らかにすることができるだろう。

２．研究の目的

東スラヴ文化圏は、ロシア・ウクライナ・ベラルーシ・ユダヤの文化が緊密でありながら一方でそれぞれ独自性を有する、ある種の「有機体」のような地域である。それぞれの文化がどのように連関し影響し合っているのか、本研究は、多言語・多文化が混在する当該地域のメカニズムの解明に迫ることを最大の目的として掲げる。この地域に対して複眼的・越境的なまなざしを向けることこそが、複雑な実相を深く理解することにつながるとの認識にもとづき、本研究によって得られた成果を広く日本社会に還元することも目標とする。さらに、この地域の文化や歴史を専門とする若手研究者を育成することも大事な課題である。

３．研究の方法

（１）本研究は、上記の目的を達成するためにメンバーを 3 つのセクションに分けている。文学・文化部門（前田和泉、越野剛、大森雅子、沼野恭子）、政治部門（塩川伸明、鈴木義一）、歴史部門（福嶋千穂、巽由樹子、赤尾光春）である。文学・文化部門は、この地域で現在活躍する作家、芸術家、研究者と連携し、リアルタイムで変化する情勢の中にある当事者たちの視点から文化的な認識を明らかにする。政治部門は、この地域の言語、文化、芸術に関する政策とそれをめぐる政治過程を明らかにするとともに、言語、文化、アイデンティティ、歴史認識に関する社会意識を比較対照して分析する。歴史部門は、この地域の国家や社会の形成プロセスやその変遷を研究するとともに、東スラヴ文化圏の一元支配を正当化する「神話」を検討すべく、近世・近代にウクライナ、ベラルーシを領域下に置いたロシアとポーランドのイデオロギーを分析する。各部門が個々の研究を自律的に深め、その成果をワークショップやシンポジウムに持ち寄って互いの知見を交換し合うことで領域的な視座を得る。

（２）日本国内・国外の研究者との交流を拡大し、ロシア・ウクライナ・ベラルーシの作家、芸術家、研究者らと連携してネットワークの構築を図る。本科研メンバーが国際学会に参加して自らの成果を発表する一方、本科研がシンポジウムやセミナーを企画・主催して、東スラヴ文化圏

より作家、芸術家、研究者を招聘するという双方向的な交流を図る。それらの成果を報告書としてまとめ、世に問う。文学・文化部門については、実際の文学作品や芸術作品（絵画、音楽、映画、アニメ等）の日本語翻訳や日本への紹介も研究に準ずる重要な使命であり、同時に社会への研究成果の一種の還元となり得ると考えられることから、そうした活動にも積極的に携わっていく。

４．研究成果

（１）2018（平成 30）年度

キックオフミーティングをおこなった後、6 月に分担研究者である赤尾光春によるセミナーを開いた。前身の科研（B）「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの文学と社会に関する跨橋的研究」ではあまり深く探求することができなかった東スラヴ文化圏におけるユダヤ文化の重要性とその位置づけをめぐり、このセミナーで詳細な報告がなされた。

続けて 7 月、東京外国語大学に特任研究員として滞在していたキエフ・モヒラアカデミー国立大学准教授のオリガ・ホメンコ氏を講師に迎え、「独立後の現代ウクライナ文学」をテーマにセミナーを行った。このときの講演は、東京外国語大学ロシア語専攻の紀要『スラヴ文化研究』第 16 号（2018）に掲載された。

同 7 月、研究代表者である沼野恭子が、指導院生で研究協力者のベラルーシ人カチャリーナ・ナザランカとともにミンスクに赴き、ノーベル文学賞受賞作家スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチにロングインタビューをおこなった。このインタビューは、アレクシエーヴィチ自身を著者に含む共著『アレクシエーヴィチとの対話――「小さき人々」の声を求めて』（岩波書店、2021 年）に他の論考とともに収められた。

11 月にウクライナからリヴィウ国立大学准教授のタラス・ルチュク氏、ベラルーシからゴメリ国立大学准教授のイワン・アファナシエフ氏を招聘し、東京外国語大学で「東スラヴ人の歌――ロシア・ウクライナ・ベラルーシの文学と社会をめぐって」と題する国際シンポジウムを開催した。他のパネリストとして分担研究者の前田和泉とカチャリーナ・ナザランカ、討論者として分担研究者の越野剛が参加した。1980 年代のウクライナ・アンダーグラウンド文学の実態、ベラルーシ文学の国民的主題としてのチェルノブイリ、ウクライナで生まれた 20 世紀のロシア語詩人アルセーニイ・タルコフスキーと 18 世紀のウクライナの哲学者フルィホーリイ・スコウォロダの関係、現代ベラルーシの若手ベラルーシ語作家アンドルーシ・ホールワトの作品等、さまざまな観点からウクライナ文学、ベラルーシ文学について語られ、活発な議論が展開された。このシンポジウムの模様は、プロシーディングにまとめられた。また、シンポジウムとは別個に、ルチュク氏は東京外国語大学でウクライナ文学について、アファナシエフ氏は東京大学でベラルーシ文学ににについてそれぞれ講演をおこなった。

2019 年 3 月には、赤尾光春の企画・主催による「修復への希求としての物語――イディッシュ文学の 20 世紀」と題するイベントが催された。アイザック・バシェヴィス・シンガー、イツホク・レイブシュ・ペレツ、ショレム・アレイヘムらイディッシュで書かれた文学作品の魅力を朗読・演奏・解説で紹介したもので、ユダヤ文化の豊穣な一面が確認できた。

この他にも、5 月に日本大学准教授の秋草俊一郎氏（ナボコフ）、11 月に名古屋外国語大学准教授の地田哲朗氏（ユーラシアの環境問題）、12 月に早稲田大学准教授の鴻野わか菜氏（ロシア現代アート）を招いて講演会を実施した。

（２）2019（平成 31、令和元）年度

4 月にマンチェスター大学教授のヴェーラ・トルツ氏を講演者として招いた。分担研究者で東京大学名誉教授の塩川伸明氏と九州大学講師の高橋沙奈美氏がパネリストとなり、ロシア革命 100 年とプーチン政権について意見を交換した。

同じく 4 月、在日ウクライナ大使館の協力を得て、東京外国語大学研究講義棟 1 階で「ウクライナ写真展」を開催し、同時に、在日ウクライナ大使イーホル・ハルチェンコ氏にウクライナを紹介する講演をしていただいた。

5 月には、ロシアのトルストイ領地・博物館（ヤースナヤ・ポリャーナ）の協力を得て、東京外国語大学研究講義棟で「レフ・トルストイ・ポスター展」を開催し、トルストイの精神的危機の前後の変化に焦点を合わせた展示をした。

7 月には、ロシア国立研究大学 高等経済学院准教授のウリヤナ・ストリジャック氏を講師として招き、日本語翻訳を通じてロシアの作家たちの世界観を探るというセミナーを開催した。

9 月には、東京外国語大学においてモスクワ国立大学と共催で日露学術セミナー「ロシアと日本――インスピレーションから相互理解へ」を実施した。ゴーリキー文学大学学長で作家のアレクセイ・ワルラーモフ氏を招聘し、ウクライナ出身のロシア語作家ミハイル・ブルガーコフについて基調講演をしていただいたほか、モスクワ国立大学ロシア語ロシア文化研究所副所長のワレーリイ・チャースヌィフ氏が報告をおこない、日本側からは研究代表者の沼野恭子を含む 8 名の研究者が報告をし、質疑応答をおこなった。このときの報告の多くは、『スラヴ文化研究』第 17 号（2019）に掲載された。

10 月には、北大スラヴ・ユーラシア研究所に特任教授として日本に滞在中のシェフィールド大学教授エヴゲーニイ・ドブレンコ氏を招き、第二次世界大戦（独ソ戦）とソ連美術の関係につ

いて講演をしていただいた。
11 月、ポーランドの作家ゾフィア・ポスムイシ原作のオペラ『パサジェルカ』の DVD 上映会を催した。ナチのホロコーストを扱ったこの作品は、ユダヤ関連のテーマである点、多言語が併用されている点、作曲家がポーランド系ソ連人である点など、本科研が解明しようとしている、東スラヴ文化圏を含む東ヨーロッパにおける多言語・多文化の交錯する状況を象徴するものである。立命館大学教授の西成彦氏に解説のミニレクチャーをしていただいた。
また、分担研究者である巽由樹子が著書『ツァーリと大衆――近代ロシアの読書の社会史』（東京大学出版会、2019）で第 41 回（2019 年度）日本出版学会賞「奨励賞」を受賞した。近代ロシアにおいて絵入り週刊誌を受容していた「読者」の存在に注目した画期的な研究書である。
このように、本科研はきわめて精力的に多彩な研究活動を繰り広げていたのだが、2020 年に入ってから新型コロナウイルスの感染拡大にともない、いくつか予定していた出張やイベントを取りやめるか、あるいは延期せざるを得なくなった。

（３）2020（令和 2）年度
2020 年度になってもパンデミックの勢いは衰えず、むしろ感染は拡大する一方で、ついに緊急事態宣言が発出されると国内の出張もままならなくなってしまった。対面による講演やシンポジウムは取りやめざるを得なくなり、オンラインでおこなうことしかできなくなった。しかし、2020 年 8 月にベラルーシで大統領選挙がおこなわれ、ルカシェンコの不正疑惑がもちあがるや大規模な反政府運動が起こり、本科研はますます研究の重要性を増すこととなった。
11 月に、ロシア NIS 経済研究所所長の服部倫卓氏を講師として招き、政治変動に揺れるベラルーシ社会の深層についてオンラインセミナーを実施した。
12 月には、キエフ経済大学准教授のオリガ・ホメンコ氏を講師として招き、現代ウクライナの女性作家たちについて、やはりオンラインでセミナーをおこなった。
2021 年 2 月に、分担研究者である塩川伸明の大著『国家の解体――ペレストロイカとソ連の最期』（東京大学出版会、2021）全 3 冊が刊行された。ソ連各地に保管されている公文書・統計集・新聞など膨大な資料・文献を駆使して国家解体の過程を克明に記したもので、総ページ数 2400 ページを超える、氏のこれまでの研究の集大成である。氏には前の科研から数えて 6 年間にわたり本科研に貢献していただいた。研究代表者として塩川氏の業績を大変誇らしく思う。
本科研は当初 3 年の予定だったが、コロナ禍にあって思うように計画していた活動ができなかったため繰越手続きをして、1 年延長することにした。

（４）2021（令和 3）年度
ベラルーシでは、本科研の主要な研究対象であるアレクシエーヴィチが、2020 年夏に権力移譲委員会のメンバーになったが、9 月にはベラルーシを出国せざるを得なくなり、以後ドイツに滞在している。夏以降、ベラルーシ当局の弾圧は厳しさを増し、ついに 2021 年 3 月末のデモを最後に市民の運動は沈静化させられた。本科研代表者は 2021 年 6 月に『アレクシエーヴィチとの対話』が刊行されたのを機にアレクシエーヴィチと連絡を取り、7 月、ドイツからの参加を得てオンライン公開研究会をおこなった。第 1 部に出演したアレクシエーヴィチに沼野恭子がインタビューし、最後に日本ペンクラブ会長の桐野夏生氏が彼女とエールを交わした。第 2 部では、上記書物の著者たちがパネリスト、分担研究者の越野剛がコメンテーターとなって知見を交換し合った。
8 月には、沼野恭子が NHK E テレ「100 分 de 名著」という番組で全 4 回にわたりアレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』を紹介し、この作品の特徴や重要性を解説した。
このようにアレクシエーヴィチと彼女の作品を中心に、論集・オンライン研究会・テレビ放送・レクチャーなどで活発に研究と発信を続けていたが、本科研の期間が終わりかけた 2022 年 2 月、ロシア軍がウクライナに侵攻し、にわかにウクライナ・ロシア関係がクローズアップされることになった。以降、本科研のメンバーは、これまでの研究成果を生かして、さまざまな媒体でロシア・ウクライナ・ベラルーシの歴史・文化・社会・現状について発信している。新たな事態を受け、科研期間終了後ではあるが、代表研究者の沼野恭子はふたたびアレクシエーヴィチにオンライン・インタビューを試みた（『ユリイカ』7 月特集号で公開予定）。
2022 年 3 月には分担研究者の赤尾光春が、「ウクライナから世界へ――ユダヤ文学の 20 世紀」というタイトルの 4 回連続朗読会をおこない、ウクライナをルーツとしてドイツ・ソ連・アメリカで活躍したユダヤ人作家のデル・ニステル、ドヴィド・ベルゲソン、ワシーリイ・グロスマン、マーティン・シャーマンを紹介した。本科研の最後を飾るイベントとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　7件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 沼野恭子	４．巻 21
２．論文標題 「歌が私たちの呼吸する空気になった」 ―― 一九六〇年代のソ連の弾き語り文化	５．発行年 2018年
３．雑誌名 総合文化研究	６．最初と最後の頁 30-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kyoko Numno	４．巻 2(16)
２．論文標題 The Japanese Translation of Russian Literature: Dostoevsky, Trugenev and Gogol	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Bicнник (Bulletin of Alfred Nobel University, Series; Phol0logy)	６．最初と最後の頁 91-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 沼野恭子	４．巻 32
２．論文標題 ふたつの極に引き裂かれる胃袋――ロシアの食文化について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ゲンロンβ	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 塩川伸明	４．巻 5
２．論文標題 ポスト社会主義の時代にロシア革命とソ連を考える	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Nyx（ニュクス）	６．最初と最後の頁 276-285
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 巽由樹子	4．巻 47
2．論文標題 ロシア革命と文化史研究	5．発行年 2018年
3．雑誌名 西洋史研究　新輯	6．最初と最後の頁 88-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ОМОРИ Масако（大森雅子）	4．巻 1
2．論文標題 Философский контекст романа "Мастер и Маргарита" (М. А. Булгаков и Г. С. Сковорода)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Динамическая поэтика / Поэтическая динамика	6．最初と最後の頁 316-324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 ОМОРИ Масако（大森雅子）	4．巻 1
2．論文標題 Солженицын и Япония	5．発行年 2018年
3．雑誌名 А. И. Солженицын: Русская и национальная литературы	6．最初と最後の頁 406-419
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Chiho Fukushima	4．巻 Rocznik 2018/2019
2．論文標題 Wplywy Ukazu tolerancyjnego z 1905 na bylych unitow w Krolestwie Polskim.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Spotkania Polonistyk Trzech Krajow - Chiny, Korea, Japonia.	6．最初と最後の頁 399-410
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 越野剛	4．巻 8
2．論文標題 接吻と白鳥とソ連映画―『1918年のレーニン』の中国における受容	5．発行年 2019年
3．雑誌名 連環画研究	6．最初と最後の頁 69-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 赤尾光春	4．巻 35
2．論文標題 『戦後ドイツに響くユダヤの歌：イディッシュみんよう復興』阪井葉子/三谷研爾編	5．発行年 2019年
3．雑誌名 独文学報	6．最初と最後の頁 53-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Маэда, И.（前田和泉）	4．巻 なし
2．論文標題 Ритмика поэзии М, Цветаевой	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Сквозь каждое сердце... (Материалы IX Международных Цветаевских чтений в Елабуге)	6．最初と最後の頁 181-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Омори Масако（大森雅子）	4．巻 なし
2．論文標題 Роман М.А.Булгакова "Мастер и Маргарита" в контексте космологии П.А.Флоренского	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Роман М.Булгакова "Мастер и Маргарита"; Диалог с современностью: коллективная монография - СПб.: РХГА	6．最初と最後の頁 388-405
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 沼野恭子	4．巻 24
2．論文標題 メニッペアの翼――ペトルシェフスカヤの幻想小説	5．発行年 2021年
3．雑誌名 総合文化研究	6．最初と最後の頁 47-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木義一	4．巻 1050
2．論文標題 中ロ国境地域の社会・経済構造と「シャトル貿易」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ロシア・ユーラシアの社会	6．最初と最後の頁 52-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 越野剛	4．巻 5
2．論文標題 コレラ・放射能・流言――ロシア文学と感染する言葉	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 178-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　2件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 大森雅子
2．発表標題 朝日会館におけるロシア文化の受容―演劇と美術を中心に
3．学会等名 シンポジウム「朝日会館と京阪神モダニズム―戦前・戦中・戦後―」
4．発表年 2018年

１．発表者名 Кёко Нумано（沼野恭子）
２．発表標題 "Японский текст" в русской прозе рубежа XIX и XX веков
３．学会等名 Российско-японский научный семинар: Лицом к лицу: тайны взаимопостижения（開催場所：サハリン）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Идзуми Маэда（前田和泉）
２．発表標題 Ритмика поэзии М. Цветаевой
３．学会等名 Девятые Международные Цветаевские чтения（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 前田和泉
２．発表標題 〈東スラヴ人の歌〉としてのスコヴォロダ～アルセーニイ・タルコフスキーの眼 差しを通じて～
３．学会等名 国際シンポジウム「東スラヴ人の歌～ロシア・ウクライナ・ベラルーシの文学と 社会をめぐって～」 （開催場所：東京外国語大学）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Chiho Fukushima
２．発表標題 Wplywy Ukazu tolerancyjnego z 1905 na bylych unitow w Krolestwie Polskim.
３．学会等名 Spotkania Polonistyk Trzech Krajow - Chiny, Korea, Japonia: VI Miedzynarodowa Konferencja Akademicka 2018 w Seulu.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Go Koshino
２．発表標題 Illness and Fire: Rethinking a Nastasia’s Emotional Behavior in The Idiot
３．学会等名 International Symposium “The Problem of Emotion in Nineteenth-Century Literature: Dostoevsky, Other Writers and Beyond（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Go Koshino
２．発表標題 Post-Apocalyptic Shift in Soviet Science Fiction of the Early 1980s
３．学会等名 ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) convention（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Го Косино（越野剛）
２．発表標題 Китайская адаптация советского фильма «Ленин в 1918 году（ソ連映画『1918年のレーニン』の中国における受容）
３．学会等名 panel “Russian Culture and the East: Image and Reception,” the 9th East-Asian conference on Slavic-Eurasian Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Go Koshino
２．発表標題 Revolutionary Drama in Belarus and Ukraine
３．学会等名 International conference “The Dynamics of Cultural Processes between Center and Periphery（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 越野剛
２．発表標題 現代アジアの映像作品におけるドストエフスキー『罪と罰』の翻案
３．学会等名 日本比較文学会全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 ОМОРИ Масако（大森雅子）
２．発表標題 Тема антирелигиозной пропаганды 1920-30-х годов в творчестве М.А.Булгакова
３．学会等名 М.А.Булгаков: в потоке российской истории XX-XXI веков
４．発表年 2019年

１．発表者名 越野剛・田村容子
２．発表標題 バレエのイメージと女性の身体：ソ連映画『1918 年のレーニン』の中国における受容
３．学会等名 日本ロシア文学会全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 越野剛
２．発表標題 セルゲイ・トレチャコフと中国：過去と未来、東洋と西
３．学会等名 モダニズム研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計11件

1．著者名 塩川伸明（小松久男・荒川正晴・岡洋樹編）	4．発行年 2018年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 240-241(417)
3．書名 中央ユーラシア史研究入門	

1．著者名 塩川伸明（社会思想史学会編）	4．発行年 2019年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 296-297(856)
3．書名 社会思想史事典	

1．著者名 巽由樹子	4．発行年 2019年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 232
3．書名 ツァーリと大衆――近代ロシアの読書の社会史	

1．著者名 福嶋千穂（阪本秀昭、中澤敦夫編）	4．発行年 2018年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 316-345(468)
3．書名 ロシア正教古儀式派の歴史と文化	

1．著者名 越野剛（越野剛・高山陽子編）	4．発行年 2019年
2．出版社 北海道大学出版会	5．総ページ数 250
3．書名 社会主義文化における紅い戦争のメモリースケープ―旧ソ連・東欧・中国・ベトナム	

1．著者名 Go Koshio	4．発行年 2019年
2．出版社 I. B. Tauris	5．総ページ数 23-37(362)
3．書名 Mikhail Suslov and Per-Arne Bodin, ed., The Post-Soviet Politics of Utopia: Language, Fiction and Fantasy in Modern Russia	

1．著者名 越野剛（井上暁子編）	4．発行年 2020年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 23-37(362)
3．書名 東欧文学の多言語的トポス	

1．著者名 沼野恭子	4．発行年 2020年
2．出版社 五柳書院	5．総ページ数 406
3．書名 ロシア万華鏡――社会・文学・芸術	

1．著者名 塩川伸明	4．発行年 2020年
2．出版社 有志舎	5．総ページ数 293
3．書名 歴史の中のロシア革命とソ連	

1．著者名 Yukiko Tatsumi and Taro Tsurumi (eds.)	4．発行年 2020年
2．出版社 London: Bloomsbury	5．総ページ数 200
3．書名 Publishing in Tsarist Russia A History of Print Media from Enlightenment to Revolution	

1．著者名 塩川伸明	4．発行年 2021年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 2265（3分冊）
3．書名 国家の解体――ペレストロイカとソ連の最期	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　義一 (Suzuki Yoshikazu) (40262125)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	福嶋　千穂 (Fukushima Chiho) (50735850)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	塩川　伸明 (Shiokawa Nobuaki) (70126077)	東京大学・大学院法学政治学研究科（法学部）・名誉教授 (12601)	
研究分担者	前田　和泉 (Maeda Izumi) (70556216)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	赤尾　光春 (Akao Mitsuharu) (90411694)	大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員 (34427)	
研究分担者	越野　剛 (Koshino Go) (90513242)	慶應義塾大学・文学部・准教授 (32612)	
研究分担者	巽　由樹子 (Tatsumi Yukiko) (90643255)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	大森　雅子 (Omori Masako) (90749152)	千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授 (12501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関